国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和2年9月1日発行　第44巻第9号通巻第516号

月刊みんぱく

2020 9月号

特集 ウポポイでアイヌ文化を魅せる

五感で接するアイヌ文化　佐々木史郎
ウポポイでのアイヌ語表示・展示解説の試み　小林美紀
作り手たちの思いと技術をつなぐ　北嶋イサイカ
次世代に伝えたい伝統芸能　山道オンネレㇰ（ヒビキ）
後世へ資料を引き継ぐための展示・収蔵環境の整備　大江克己

ひとつの列島 ふたつの国家 みっつの文化

佐々木 利和（ささき としかず）

妙なタイトルであるが、おわかりいただけるだろうか。

ひとつの列島とはいうまでもなく日本列島。ふたつの国家とは明治五年以前に存在していた琉球国王を核とする琉球王国と、天皇を核とする日本。そしてみっつの文化というのは北からアイヌ文化、日本文化、そして琉球文化をいう。この文化にはことばや歴史、芸術行為、固有の生活様式などをふくむ。

これについて語り出すときりがないので、とりあえず、みっつの文化に注目してみる。このみっつの文化のなかでもっとも知られていないのがアイヌ文化だろう。学校でアイヌ文化を学ぶことはほとんどなく、アイヌ文化は国民共通の知識とはなってはいなかった。それはどうしてだろうか。

平成二一年七月に『アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書』が内閣官房長官に提出され、民族共生のための象徴空間（現ウポポイ）設置などが盛り込まれている。そのなかで「これまでアイヌの歴史や文化については、日本国民共通の知識とはなってこなかった」理由がいくつか指摘されている。

①歴史的にアイヌの人びとが圧倒的に少数であった、②我が国の政治の中心から遠く離れた北辺の住人、③生業や宗教の差異から生じる文化的相違が一方の目からは野卑（やひ）陋習（ろうしゅう）とみなされた、④その享受者は野蛮な存在であり、その文化は価値の低いもの、という認識などである。

これらの指摘は重要である。日本文化という目線からのみアイヌ文化をみるという行為や、その結果アイヌ文化は野卑陋習であり、アイヌ文化を担っている人びとは野蛮人であるという見下した目線が存在したことを示している。文化に接するとき、その尺度はひとつではないはずである。

民博のアイヌ展示のなかに樺太・千島アイヌの文化財がある。なかでも千島アイヌのそれは、まとまった文化財としてすぐれたもので、国指定文化財になっていないのがおかしい資料群だ。だが残念なことに、これらを残した文化の伝承者は現在ただのひとりもいない。明治八年の千島・樺太交換条約による強制移住の施策のせいで、千島アイヌの文化伝承者は地上からきえた。

北海道、樺太、千島とアイヌ文化は多様である。ウポポイがそのなかの失われた文化の再生をめざす場として、またアイヌの人びとの心のふるさととして、さらに国民理解の場として、大きく発展することを期待する。そしてそう遠くない日、ウポポイの職員の大多数がアイヌの人びとで占められることを願っている。

プロフィール
1948年北海道生まれ。北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授、東京国立博物館名誉館員。東京国立博物館、文化庁、国立民族学博物館をへて現職。法政大学大学院修士課程修了、早稲田大学博士（文学）。日本近世史、博物学、アイヌ民族史を専門とし、おもな著書に『アイヌの工芸』（至文堂）、『アイヌ史の時代へ――余滴抄』（北海道大学出版会）などがある。

月刊 みんぱく 9月号目次

1 エッセイ　千字文
ひとつの列島 ふたつの国家 みっつの文化
佐々木 利和

特集　ウポポイでアイヌ文化を魅せる

2 五感で接するアイヌ文化
佐々木 史郎

4 ウポポイでのアイヌ語表示・展示解説の試み
小林 美紀

5 作り手たちの思いと技術をつなぐ
北嶋 イサイカ

7 次世代に伝えたい伝統芸能
山道 オンネレク（ヒビキ）

8 後世へ資料を引き継ぐための展示・収蔵環境の整備
大江 克己

10 ○○してみました世界のフィールド
フィールド調査のニューノーマルについて考える
中村 雄祐

12 みんぱく Information

14 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
バスケタリーはどこまで遡るのか
山岡 拓也

16 みんぱく回遊
スマートフォンで展示場を歩く
日髙 真吾

18 シネ倶楽部 M
父と少年の旅
――「オルジャスの白い馬」
藤本 透子

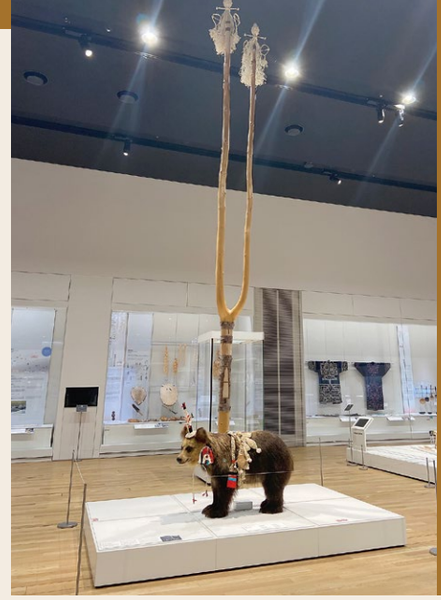
20 ことばの迷い道
「似て非なる」を地で行く
日髙 晋介

21 次号予告・編集後記

特集

ウポポイでアイヌ文化を魅せる

二〇二〇年七月、ウポポイ（民族共生象徴空間）が北海道白老（しらおい）町にオープンした。初となる国立のアイヌ民族博物館、そして民族共生の名を冠した公園などからなるこの空間は、アイヌ文化の復興・発展のための拠点だ。本特集では、そのまだ始まったばかりの取り組みと挑戦を紹介する。



クマの霊送り儀礼用のクマつなぎ杭（2020年）

五感で接するアイヌ文化

佐々木（ささき） 史郎（しろう） 国立アイヌ民族博物館館長

ウポポイ（民族共生象徴空間）は、二〇〇七年の「先住民族の権利に関する国際連合宣言」と二〇〇八年の国会での「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を受けて、今後のアイヌ政策の進め方を諮問された「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告に基づいて設置が決定された国立の施設である。二〇一六年にアイヌ総合政策推進会議が策定した『「民族共生象徴空間」基本構想（改訂版）』（以下『基本構想』）によれば、この施設は「我が国の貴重な文化でありながら存立の危機にあるアイヌ文化を復興・発展させる拠点として、また、我が国が将来へ向けて、先住民族の尊厳を尊重し差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴という、重要な意義を有する国家的なプロジェクト」（『基本構想』、三頁）と位置づけられている。その設立の意義は「アイヌ文化復興等に関するナショナルセンター」となることであり、展示・調査研究機能、文化伝承・人材育成機能、体験交流機能、情報発信機能、公園機能、精神文化尊重機能という六つの機能をもつ。そして、その中核施設として、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園、慰霊施設（大学等に保管されていた発掘された遺骨と副葬品を、返還先が決まるまで一時的に保管する施設）が二〇二〇年三月までに整備された。また、二〇一八年一二月には「ウポポイ」（皆で歌うことを意味するアイヌ語）という愛称も決められた。

アイヌ民族博物館と民族共生公園

博物館は文化庁が建設し、公園は国土交通省が整備するというように、役所による縦割り行政は見られるが、双方ともその運営は公益財団法人アイヌ民族文化財団に委託され、ひとつの組織（民族共生象徴空間運営本部）に編成されている。それぞれ手法は異なるが、その目指すところはともにアイヌ文化の復興である。博物館は展示という手法により、アイヌ文化を広く来館者の観覧に供するとともに、最新鋭の機器類を活用した調査研究をおこなって新しい知見を蓄積し、それを展示、教育、文化伝承活動等に活かしていく。近年、触れることができる体験型展示が注目されていることから、そのような展示コーナーも設けた。

他方、公園では、体験交流ホールでの歌、踊り、楽器演奏などによるアイヌの芸能の紹介、体験学習館での教育プログラムによるアイヌの衣食住に関する学習と体験、工房での一流の工芸家や職人による木彫り、刺繍等の製作実演と製作体験、そして伝統的コタン（集落）での語りや儀礼をとおした精神世界や伝統的生活の紹介といったことを来園者に提供する。公園でも博物館でも、重要なキーワードは「体験」である。目で見たり、耳で聞くだけでなく、舌で味わったり、肌触りを確かめたり、手を動かして作ってみたり、身体を動かし声を出してみたりして、五感でアイヌ文化に接することを重視している。

伝統の継承と創造

もうひとつの重要なキーワードは「伝承と創造」である。祖先の精神と技術を着実に受け継ぎ、次世代に受け渡すとともに、そこに今の自分たちの独創を盛り込み、時代に合った現代のアイヌ文化を創造する。公園ではホールでの演目に、伝統的な歌と踊りのほか、創作プログラムを加えた。博物館では、伝統の技の継承をテーマにした開館記念特別展「サスイシリ私たちが受け継ぐ文化～アイヌ文化を未来へつなぐ～」を開催している。また、ウポポイ内ではアイヌ語を第一言語と位置づけて、アイヌ語の学習者に園内の表示や博物館の解説のアイヌ語テキスト作りを依頼し、それをとおしてアイヌ語の復興を図っている。

ウポポイはアイヌ文化が輝く場である。来場者には公園で、博物館で、そのすばらしさを全身で感じて、理解してもらうことを期待したい。新型コロナウイルス感染症拡大により、二〇二〇年四月開業予定が二度も延期されたが、七月一二日に本格的に開業した。

上：プラザ展示（2020年）
右：探究展示テンパテンパ（2020年）

チキサニ広場の舞台と客席（2020年）

国立アイヌ民族博物館（提供：公益財団法人 アイヌ民族文化財団、2020年）

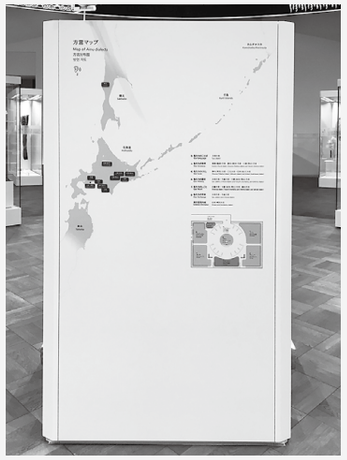
ウポポイでのアイヌ語表示・展示解説の試み

小林（こばやし）美紀（みき）　国立アイヌ民族博物館研究員

第一言語はアイヌ語

「アヌココロ アイヌ イコロマケンル」。当館に入ろうとすると、エントランス右手にこう書かれているのがまず目に入る。その下に日本語で「国立アイヌ民族博物館」と表示されている。国立アイヌ民族博物館が含まれるウポポイでは、アイヌ語を第一言語としている。そのため、多言語表記をしている箇所では、基本的にアイヌ語が一番先頭にくるように表示している。

アイヌ語直訳は「わたしたちが共有するアイヌの宝物が入った建物」（2020年）



各解説文の方言を示すマップを展示室に設置（2020年）

アイヌ語は二〇〇九年にユネスコにより「消滅の危機にある言語」と位置付けられた。「消滅の危機にある言語」とは、そのことばを使う人が現在は少なくなり、このままではなくなってしまうかもしれないということばである。このような状況に置かれているアイヌ語を第一言語として表示するにあたり、さまざまな検討が重ねられた。

アイヌ語で解説文を書く

アイヌ語で解説文を作成する計画をした際、課題のひとつになったのが、アイヌ語にあるさまざまな方言のうち、どの方言で執筆するかであった。こうした課題を検討するために、アイヌ語研究者や有識者で構成される委員会を立ち上げた。そこでの議論の結果、今回のアイヌ語解説文作成についてはアイヌ語学習の機会としての活用を目指すこととし、各地でアイヌ語を学ぶ人や継承活動をしている人に執筆してもらうことになった。方言については、執筆者に希望する方言を選択してもらうこととした。

こうしてでき上がった解説文が各所に配置され、今、展示室のなかでは多様な方言のアイヌ語の文章を読むことができるようになっている。また、音声ガイドを通じて聞くこともできる。

新しい表現やことばをどうするか

「国立アイヌ民族博物館」や「ライブラリ」など、既存のアイヌ語にはない表現や新語は、ワーキング会議を立ち上げ検討した。この会議は、これまでアイヌ語で執筆を重ねてきた経験者や研究者、アイヌ語の知識があるウポポイ職員といったメンバーで構成されている。各単語をアイヌ語でどのように表現するか案を出してもらうとともに、出された案に文法的な誤りがないかを検討した。そして、このワーキング会議をとおった案のなかから、ウポポイ職員のメンバーが実際に表示として使用するものを絞り込むという手順で選定した。

どの単語についても熱い議論が交わされたが、どのようにアイヌ語にするかで特に悩んだもののひとつがウポポイの正式名称である「民族共生象徴空間」だった。「民族共生」をどう表現するかさまざまな案が提案され、最終的に「ウアイヌコロ コタン」となった。「ウアイヌコロ」は「互いを敬う」、「コタン」は「村、集落」という意味である。「民族共生」とはお互いを尊重し合うことからはじまるという思いから提案された語である。

ウポポイではアイヌ語を第一言語としているが、じつは今の段階で各種表示や展示解説のなかでアイヌ語を入れることができた箇所は一部にすぎない。ウポポイのオープンがこの取り組みの第一歩だ。

イコロ トゥンプ オッタ アナクネ「アオカイ」—アイヌ エネ ヤイヌ ヒ コラチ イワン オルシペイペ ネ アイヌイタク シンナイカネ アイヌプリ シンナイカネ アイヌウパシクマ シンナイカネ アエチヌカレ．ウサ オカイ ペ アケレ コロ アエヤイパカシヌ カ エアシカイ．
タパン ケンル オンナイ タ アン オルシペニソシ イタクペカ タ アイヌイタク アヌイェ．ウサ コタン ウン アイヌイタク エヤイパカシヌ コロ オカイ ウタラ ヌイエ プ ネ ルウェ ネ．

基本展示室は、「私たち」というアイヌ民族の視点で、ことば、文化、歴史について6つのテーマに分けて紹介します。実際の資料に触れて体験できるコーナーもあります。
館内および展示室の解説パネルやサインには、アイヌ語による表示を行っています。アイヌ語の解説文は、各地のアイヌ語を受け継ぐ人が書いたものです。

アイヌ語が書かれた展示室案内（2020年）

作り手たちの思いと技術をつなぐ

北嶋（きたじま）イサイカ　国立アイヌ民族博物館学芸員

アイヌ民具の制作依頼

現在のアイヌの民具は、伝統的な木彫りの盆やアイヌ刺繍をあしらった着物から、木彫りの熊や日常生活で使うバッグなどにアイヌ文様を入れたものまでさまざまなものがある。また、アイヌ文化を踏まえたアート作品も美術館などに展示され、時代に合わせて民具の枠を超え変化しているものと変わらず残っているものがある。

二〇一九年度まで当館は、現在活躍中の作り手を紹介し、技術継承の参考とするため彼らが制作した衣服や木彫品などを購入してきた。制作は北海道アイヌ協会が認定した優秀工芸師を中心に依頼し、展示では技術が認められている作り手やアイヌ民具の担い手（技術を学んでいる最中の人）の作品も紹介している。

作り手の思いとこれから

基本展示のひとつ「私たちのくらし～今に受け継ぐ衣服と心」では、先人が作った着物の隣に優秀工芸師が作った着物をならべ、作者のコメントとともに紹介している。制作期間が短かったにもかかわらず八名の方々が協力してくださったことに感謝している。着物の大きさだけを指定し、作り手が選んだ文様や技法で制作していただいた。

「サスイシリ」での木彫の民具の展示（2020年）

その文様は、オリジナルや複製、自分の家系に伝わっているものなどさまざまである。作り手の思いがこもった作品を来場者に見ていただきたい。また、このような展示を通じて伝承者を目指す人たちと作り手とをつなぎ、込める思いや文化を教えてもらいながらもの作りができる環境を作っていきたい。

さまざまな継承のかたち

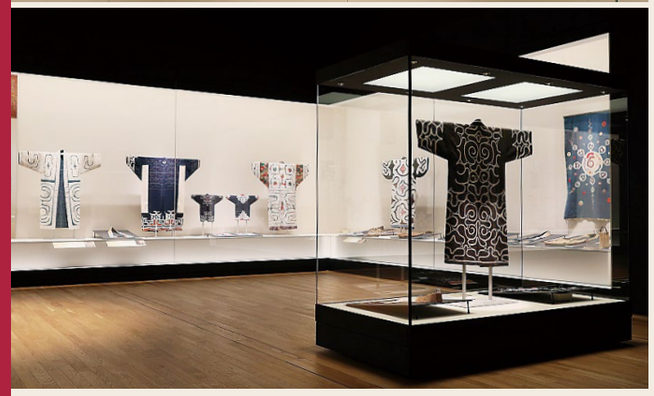
開館記念特別展「サスイシリ 私たちが受け継ぐ文化～アイヌ文化を未来へつなぐ～」では、五つのテーマにわけ、文化継承のあり方を紹介している。展示資料のなかでエムシアッ レクトゥンペ（刀掛帯の技法で作った首飾り）というアイヌ文化を踏まえた首飾りが展示されている。この首飾りの作り手によれば、祖母から習ったエムシアッ（刀掛帯）を現在の日常生活にもとり入れたいという思いから作ったとのこと。このように家族内で技術を継承している方もいれば、大人になって職業訓練校がきっかけで楽しみながら文化伝承を続けている方、曾祖父の技術を作品を見ながら学んでいる方などもいる。さまざまな継承のかたちがあることを作り手の方々から聞くことができた。

アイヌ民具の担い手

博物館での展示資料といえば、古い資料を思い浮かべる方が多いかもしれない。当館では、先ほど紹介した優秀工芸師の他にもアイヌ民具の担い手が作った新しい作品も展示している。これは当館が技術伝承の場として機能し、未来の担い手が自分も作りたいと思える場所になってほしいと考えるためである。

今後の活動

作り手の方々との交流のなかで心に残る話がたくさんあった。そのなかで「最近の担い手は、手がきれいだが、アイヌ文化の知識が少ない」とか、「わたしたちが入れ墨を入れている人たちと生活をした最後の世代なので、自分がそれを表現して伝えたい」というようなことばを聞いた。わたしたちには、伝統的なアイヌ文化をしっかりと見てきた世代から教えてもらえるチャンスがある。作り手から話を聞きながら技術を学ぶことの重要性を感じる。資料の熟覧とともに、このような作り手たちによる技術講習会を開催することで、ウポポイが、伝承者が着実に育つ場所のひとつになればと考えている。



上：先人が作った着物（左）と優秀工芸師が作った着物（右）の展示（2020年）
下：「サスイシリ」でのアイヌ刺繍関係展示（2020年）

アイヌ民具の担い手が作ったマエタレなどの展示（2020年）

次世代に伝えたい伝統芸能

山道（やまみち） オンネレク（ヒビキ）
民族共生象徴空間運営本部舞踊グループリーダー

アイヌの歌と踊り

アイヌの歌と踊りは、生活と密接に結びついており、日々の暮らしや儀礼のなかで受け継がれてきたものである。現代では、国の重要無形民俗文化財に「アイヌ古式舞踊」という名称で指定されており（一九八四年）、北海道内の一七地域で保存団体が活動している。二〇〇九年にはユネスコ無形文化遺産に登録されたことから、アイヌの歌と踊りは「アイヌの伝統芸能」とよばれ、さらに広く知られるようになった。

ウポポイでの復興と伝承のかたち

アイヌの伝統芸能の音声・映像資料は世界各地の博物館や大学の研究室等に数多く残されている。しかし、各地域の伝承者や学習者はそれらにアクセスしづらく、伝統芸能を復興していくことは難しいのが現状である。各地域には、特色のある伝統芸能が伝承されているが、それを担う人材も不足してきている。

ウポポイの舞踊グループでは、蓄積されてきた資料や情報を学びたい人たちに還元していける体制を整えたいと考えている。絶えかけていた演目の復元や各地域の伝承演目を受け継いでいくことに力を入れており、現在まで一〇演目を復元した。その他にも地域連携として阿寒、帯広、むかわ、本別（ほんべつ）の伝承者に協力いただき七演目を習得した。

伝統芸能上演プログラム

体験交流ホールで毎日開催する伝統芸能の解説プログラムでは、北海道五地域、樺太（現サハリン）二地域の演目を上演し、創作プログラムでは、北海道四地域の演目を上演している。

解説プログラム「シノッ アイヌの歌・踊り・語り」は、日本語での解説後に演目を上演する形式で、北海道各地の映像と融合した伝統芸能を楽しむことができる。

創作プログラム「イノミ アイヌの祈り・歌・踊り」は、狩り等で得た動物の魂をカムイ（神）の世界に送る際におこなう儀礼「イヨマンテ」を題材としている。これは、本来のイヨマンテの再現ではなく、現代に生きるわたしたちの考えを盛り込んでいる。わたしたちは過去のイヨマンテを見る機会がなく、文献でしか知ることができない。先人が残した文化を知りたい、いつか実現したいという思いからこの舞台ができたのだ。毎年、北海道では人里に下りてくる熊が駆除される。そうした動物たちをわたしたちが受け入れ、カムイの世界に送ってあげたいという思いもある。

26名のウポポイ舞踊グループ（2020年）

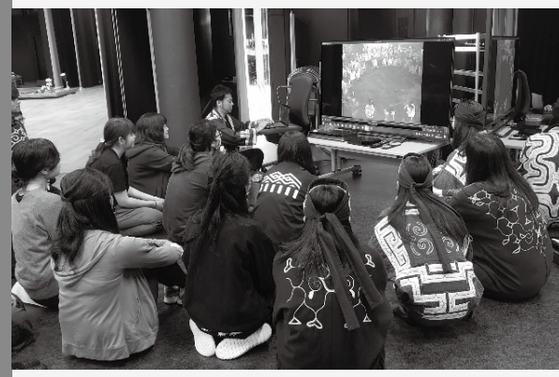
イヨマンテ リムセ（熊の霊送りの踊り）（2020年）

後世へ資料を引き継ぐための展示・収蔵環境の整備

大江（おおえ）克己（かつき）　国立アイヌ民族博物館研究員

ストーリーは、熊のカムイの視点で「最近は人間たちからわたしたちの世界に供物や土産が届かない。人間の世界はどうなっているのか気になったので覗いてみると、見たことのない景色が広がっていた。ビルが立ち並び、スクランブル交差点の雑踏、時代は変わっている。よく見てみると、そのなかでも先人の思いを受け継いでいきたいという人たちが集まっている。その心を覗いてみよう」と始まる。その後、人間に視点が変わってストーリーが展開していく。イヨマンテのなかでも、饗宴に焦点を当てており、より楽しみが伝わるようにこだわっている。

ウポポイにはアイヌとシサム（和人）をはじめ、さまざまなルーツをもつ人たちが集まり、イヨマンテについて共生しながら学び、伝えていくための舞台がある。かつてのイヨマンテに集まった人たちが楽しんだ儀礼のなかにある饗宴、消えてはいないその分かち合いの心をぜひ覗きに来ていただきたい。



演目復元の様子（2020年）

アイヌ民族資料の性格

アイヌ民族資料は、木彫のある小刀やガラス玉の首飾り、刺繍の入った衣類、和人の絵師がアイヌを描いた絵画など多岐におよぶ。おもに、植物素材で構成された資料が多く、温湿度や生物被害等の環境変化による劣化を受けやすい性質をもち、適切な環境制御が求められる資料群と言えるだろう。ここでは、当館で進めてきた、後世へ資料を引き継ぐための展示・収蔵環境の整備について述べていく。

資料の劣化要因と制御

展示や保管中に資料の劣化を招く要因では、温湿度、照度、空気汚染物質、生物被害の四つの影響が大きい。これらの影響をいかに制御して、安定した空間を資料へ提供できるかが重要である。では、どのような制御が求められるのであろうか。

温湿度は、変化によるひび割れや高湿度下でのカビの発生等を防ぐため、資料に損傷を与えない安定した値での制御が求められる。当館の展示室や収蔵庫は、二四時間の空調制御により温度二〇～二二度、相対湿度五五％RHで運用している。また、展示ケースには気密性の高いエアタイトケースを採用し、空気交換を少なくすることで温湿度変化を緩和する仕様としている。

次に照度を見てみる。展示中や保管中、強い光に長期間さらされると退色の恐れが出てくるため、照明の強さや積算時間を考慮して資料を利用することが大切だ。当館の展示室では一〇〇ルクス以下の照度となるよう照明を調整し、展示資料の積算時間を管理して展示替えを計画している。

展示室に導入したエアタイトケース（2020年）

空気汚染物質とは、建材などが発する有機酸やアンモニア等の化学物質を指す。資料はそれらの高濃度環境下に置かれると変色等を招くため、当館では室内の建材や展示ケースを十分に乾燥させ、有機酸濃度一七〇ppb以下、アンモニア濃度三〇ppb以下に低下させた。展示ケースには汚染源となる合板をもちいず、石膏ボードやアクリルの演示具を利用するなど工夫している。収蔵庫の棚は金属製にし、棚板には中性紙ボードを敷いている。

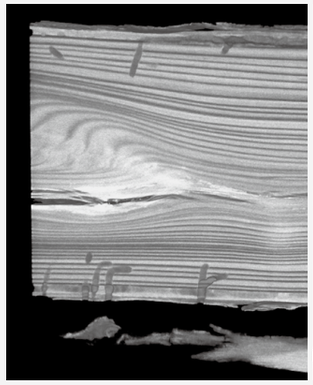
生物被害とは、害虫による食害やカビ等の影響を指し、侵入の監視や防除対策が必要である。当館では、展示室や収蔵庫にトラップを設置して監視している。殺虫をする生物処理装置の導入や殺菌をする燻蒸業者との連携など、対応の体制も整えた。

金属製の棚を配した収蔵庫（2020年）

「寒冷地」という課題

ただ、寒冷地での展示・収蔵環境の制御には、本州等の温暖な地域にはない課題が多くある。空調制御で温湿度を整えるなどさまざまに整備をしてきたが、氷点下となる冬季に外の影響をどこまで防ぐことができるだろうか。外気の影響による室内温湿度の不安定化は本州より激しく、予想以上の展示・収蔵環境の乱れが起こりうる。また、害虫が越冬のために建物に入り込む事例もある。制御や調整を続けながら、導入したX線CT装置などの科学分析装置で資料の劣化を診断し、データの蓄積と解析を継続することが今後の課題と言える。

後世へ資料を引き継ぐための環境制御の下地は整った。当館での寒冷地における展示・収蔵環境の整備は、今、運用という次の段階を迎えるのである。

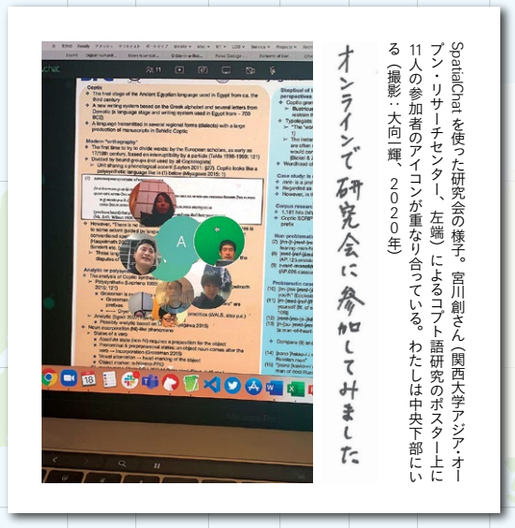


右：アイヌ民族資料を元に設計したX線CT装置（2020年）
左：食害を受けた資料のCT画像による診断（2020年）

○○してみました世界のフィールド

フィールド調査のニューノーマルについて考える

中村 雄祐（なかむら ゆうすけ）
東京大学教授



SpatialChat を使った研究会の様子。宮川創さん（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、左端）によるコプト語研究のポスター上に11人の参加者のアイコンが重なり合っている。わたしは中央下部にいる（撮影：大向一輝、2020年）

新型コロナウイルス感染症は、このコーナーのテーマであるフィールド調査そのものにも大きな影響を与えている。海外渡航や人との接触を自粛せざるを得ない状況下で、調査・研究はこれからどうなっていくのか。今号では、文化資源の調査や活用に取り組む筆者の考えを聞いてみよう。

外に出られないフィールド調査者

『月刊みんぱく』編集部よりこの原稿の執筆依頼が届いたのは二〇二〇年三月だった。ちょうどCOVID-19、いわゆる「新型コロナウイルス感染症」が日本でも広がり始めたころで、わたしが勤める大学でも卒業式や入学式が規模を縮小され、授業や会議がオンラインでおこなわれるようになるなど、生活が様変わりしてしまった。その後も人との接触を控える日々が続いており、この原稿をまとめている六月時点では国内外で予定されていた調査もすべて取りやめとなっている。

こんななか、依頼を受けたテーマ「目と頭を使うだけでなく自らの身体も使って調査をする」にふさわしい過去の調査を思い返していたのだが、どんなエピソードを紹介するにせよ「しばらくこういう調査は難しそう」と締めくくらざるを得ず、筆が進まない。じつを言えば、調査する側もそれに協力する側もスマホをもっていることが当たり前になっており、フィールド調査においてもオンライン化はすでにじわじわと進んでいた。しかし、COVID-19による変化はあまりに大きく、フィールド調査の「ニューノーマル」についても考えざるを得ない日々である。

東京アラート下の東大本郷キャンパス。学期中にもかかわらず閑散としているが、多くの授業がオンラインでおこなわれている。オンライン・コミュニケーションを写真に撮るのは難しいものである（2020年）

オンラインで人と会う

春以降、世の中は「オンラインで効率よくできることはオンラインで」に舵（かじ）を切りつつある。「会議は意外と大丈夫」という意見が聞かれる一方で、医療、福祉、飲食、ライブなど感染リスクを避けるために大変な苦労を強いられる現場もある。そんなとき、わたしたちは人と直接触れ合うことのかけがえのなさを再認識する。しかし、だからといって、何でも直接会うのがいちばんとも言い切れないところが社会の妙である。特に、情報共有や合意形成に関してはあえて媒介者（物）をあいだに置く方が事が進むこともある。だからこそ「今後、会議はオンラインで」という声も聞かれるのだろう。

結局、わたしたちは、対面でもオンラインでも、互いのことば、声色、目線、表情、身振り、さらにはまわりの反応、気配にできるだけ注意を払いながら、ときにはあえてそれらを無視しつつ、間合いをはかりながら暮らしている。

★ 日本、東京

フィールド調査の「ニューフロンティア」

このような人と人の間合いの機微こそ、人間相手のフィールド調査で大切にされてきたことでもある。基本は誰もが日々発揮している感覚だが、それを職人芸の域にまで鍛えることにフィールド調査者は情熱を注いできた。そして、その一方でフィールド調査者が同じぐらい熱心に取り組んできたのがその場にいない誰かに自らの調査経験を伝えることである。さらに、調査地の人びとへのフィードバックも重視されるようになって久しい。フィールド調査はいわばリモート・コミュニケーションのはしりでもあり、その歴史にはコミュニケーション技術史という面もある。

そういう点から見て、技術史の面白いところは人びとの欲求や不満に応えるように新しい道具が生まれてくることである。わたし自身、最近はさまざまな情報技術をいかに活用するかという課題に仕事の比重が移っているが、パンデミック以降、その重要性はさらに高まっている。そんななか、最近の自粛生活中に研究仲間と使ってみたツールの一例として、オンラインで画面上を自由に移動しながら会話ができるツールSpatialChatがある。ふだん、わたしたちは互いにあまり近づきすぎないよう間合いをとりながら人と接するものだが、このツール上ではユーザーのアイコンが文字どおり団子状に重なり合って会話が進み、「久しぶりに三密だね！」と盛り上がった。情報学の専門家によればまだ改善の余地があるとのことだが、新しい技術ならではの面白い経験だった。

パンデミックを契機にオフラインとオンラインとのハイブリッドが一段と進み、今、世界ではあらたなフロンティアが拓かれつつある。計算機科学、情報デザイン、情報倫理など勉強することも増えて、フィールド調査者はますます忙しくなりそうだ。

コスタリカの農村の集会所で生活改善アプローチの実施状況を調査する様子。自分が現役のあいだはもうこういう現地調査はできないかもしれないと思う。ただし、このとき、村の人びとはすでにスマホをもっており、わたしたちは彼らのスマホで記念撮影をおこない、SNSの友達申請を受けた（2013年）

コスタリカの地方の役所で職員と議論する様子。職員が仕事中に農村で撮った写真をスクリーンに映しながら、生活改善アプローチの実施状況について意見交換している。時間も予算も少なく、調査者が自ら訪問できる場所は限られているが、工夫次第で情報技術を使った有意義な議論も可能である（2014年）

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

特別展
「先住民の宝」

世界には、「先住民」とよばれる人たちがいます。先住民とはだれか？「宝」にこめられた思いとは何なのか？ 本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

開幕に先駆けて、教員による解説付きの動画をユーチューブに公開しております。パノラマムービーと組み合わせた動画ですので、特別展示館内をご覧いただきながら解説をお聞きいただけます。順次追加していきますのでお楽しみに。

会期　10月1日(木)～12月15日(火)
会場　特別展示館

仮面
（マレーシア、オラン・アスリ）

■関連イベント
みんぱく映画会
「斧は忘れても、木は覚えている」

本作は、マレーシアの先住民オラン・アスリの現状やマレーシアがブミプトラ政策を採用する大きな要因となった「人種暴動」（1969年）に関するドキュメンタリー映画です。森林破壊に直面するオラン・アスリの悲惨な状況、マイノリティであるオラン・アスリや華人を取り巻くマレーシアの歴史を関係者のインタビューなどを交えながら紹介します。本誌8月号の「シネ倶楽部M」もご参照ください。

日時　10月10日(土)13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂
解説　盛田茂(東洋大学アジア文化研究所客員研究員)
司会・解説　信田敏宏(本館 教授)
※要事前申込(先着順／定員112名)、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ、入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。
【申込方法】本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。

●友の会(維持会員・正会員)電話先行受付（定員24名）
期間：9月3日(木)～9日(水)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話 06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）

●一般受付
期間：9月10日(木)～10月8日(木)
・オンライン予約
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・メール・電話予約
予約の際に、①件名「10月10日みんぱく映画会」、②参加人数、③氏名(漢字・フリガナ)、④電話番号、⑤メールアドレス、⑥住所をお知らせください(③～⑥は参加者全員分)。
【申込先】千里文化財団イベント予約受付
メール　yoyaku-event@minpaku.ac.jp
電話　06-6877-8894
（9時～16時、土日祝を除く）
定員に満たない場合、11時から本館2階講堂前にて当日参加を受け付けます。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタル・データベースをとおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。

会期　9月3日(木)～10月20日(火)
会場　本館企画展示場

「知的生産の技術」のための「こざね」（撮影：尼川匡志）

みんぱく映画会・第48回みんぱくワールドシネマ
「判決、ふたつの希望」

ベイルートを舞台にしたレバノン・フランス映画です。レバノン人とパレスチナ難民のささいな口論が発展して社会を混乱させ、法廷で複雑な過去の真実が明るみになっていく様をとおして、異なる価値観をもつ人びとがどのように共存していくことができるかを考えます。

日時　9月12日(土)13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂
司会・解説　菅瀬晶子(本館 准教授)
※要事前申込(先着順／定員112名)、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ、入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。
【申込方法】上記、10月10日開催のみんぱく映画会と同様です。ただし、左記の点にご注意ください。
※友の会(維持会員・正会員)電話先行受付は終了しています。
※一般受付の申込期間は9月10日(木)までです。
※メール・電話予約の場合、①件名は「9月12日ワールドシネマ」としてください。

© 2017 TESSALIT PRODUCTIONS – ROUGE INTERNATIONAL – EZEKIEL FILMS – SCOPE PICTURES – DOURI FILMS

みんぱくゼミナール

会場　本館講堂
※要事前申込(先着順／定員各回112名)、参加無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）
※事前予約の方へ、入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配付します。

第502回　9月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術
梅棹忠夫は、調査で得た資料を整理して論文にするだけでなく、関連資料をアーカイブズとして残しています。資料の収集から公開までの研究サイクルを、新技術も用いて実現するようすをお話しします。
講師　小長谷有紀(本館 客員教授)
　　高野明彦(国立情報学研究所 教授)
　　飯田卓(本館 教授)

1969年、京都大学の研究室で仕事をする梅棹忠夫
（提供：梅棹淳子）

第503回　10月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
アイヌ文学の世界――韓・日との比較
アイヌ民族が伝承してきた物語は、登場するキャラクターや語り方などによっていくつかのジャンルに分けられてきました。朝鮮半島や日本の物語と比較し、共通点や違いについて考えます。
講師　北原モコットゥナシ(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授)
　　齋藤玲子(本館 准教授)

【ゼミナール申込方法】本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。
●友の会(維持会員・正会員)電話先行受付(定員24名)
※第503回のみ(第502回については受付を終了しています)
期間：9月14日(月)～18日(金)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話 06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）
●一般受付
第502回申込期間：9月17日(木)まで
第503回申込期間：9月23日(水)～10月15日(木)
・オンライン予約(定員50名)
みんぱくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(定員38名)※定員はオンライン予約状況によって変動します。
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

会場　第5セミナー室
※申込不要(当日先着順／定員各日42名)、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料について分かりやすくお話しします。

9月13日(日)14時30分～15時(14時開場)
デジタル技術でみる「梅棹忠夫アーカイブズ」
話者　丸川雄三(本館 准教授)

9月27日(日)14時30分～15時(14時開場)
現代に活かす「知的生産の技術」
話者　飯田卓(本館 教授)

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

第504回　9月5日(土)13時30分～15時30分
【第500回記念友の会講演会／梅棹忠夫生誕100年記念対談】
知的生産のフロンティアの原点
――探検家 梅棹忠夫を語る
話者　石毛直道(本館 元館長、本館 名誉教授)
　　吉田憲司(本館 館長)
ファシリテーター　飯田卓(本館 教授)
会場　本館講堂(事前申込先着順／定員105名)
※本催しは定員に達したため、受付を終了しました。
対談の様子は後日、友の会ホームページならびにユーチューブのみんぱく友の会チャンネルで公開します（9月下旬予定）。
※本催しは、2020年5月に予定していた第500回友の会講演会を延期して開催するものです。

第505回　10月3日(土)13時30分～14時40分
【特別展「先住民の宝」関連】
トーテムポール――カナダ北西海岸先住民の宝
講師　岸上伸啓(本館 教授[併任])
【聴講方法】
①本館講堂にて聴講(定員110名)
②オンライン中継での聴講(友の会会員のみ)
北アメリカ北西海岸地域にある先住民の村々には、動物や人間などの姿を彫りこんだ巨大な木柱が、多数立てられています。それらはトーテムポールとよばれ、現在、ハイダやクワクワカワクゥなど各民族の宝であり、象徴です。トーテムポールとは何か、その歴史的変遷、現在の制作状況とそれに関連するポトラッチ儀礼について解説します。あわせて、みんぱくの前庭に立っている新旧2本のトーテムポールの制作についても紹介します。
【申込方法】
①本館講堂にて聴講
友の会会員は予約不要(当日会員証提示)。
一般は500円(要事前申込)。
一般の方は左記受付フォームよりお申し込みください。
※特別展関連の友の会講演会は、フリーパスをお持ちの方も無料でご聴講いただけます(本催しも該当)。
②オンライン中継での聴講(友の会会員のみ)
左記受付フォームよりお申し込みください。
https://www.senri-f.or.jp/505tomo/

世界の
バスケタリー
×
バスケタリーの
世界

バスケタリーはどこまで遡るのか

山岡拓也（やまおかたくや）　静岡大学教授

バスケタリーの考古遺物は、それが植物から作られているがゆえに、ほとんど残されていない。しかし、バスケタリーの歴史を追うことができないわけではない。今号ではバスケタリーそのものから、それを作る道具である石器へと視点を移し、実験考古学の観点からバスケタリーの起源に迫る。

旧石器時代における植物資源利用

本連載の初回で説明されたように、チェコの後期旧石器時代の遺跡で布やバスケタリーの圧痕がついた粘土片が複数発見されており、それらは二～三万年前に遡る。日本列島では佐賀県東名（ひがしみょう）遺跡で、約八〇〇〇年前の縄文時代早期後葉に残されたカゴが大量に出土し、バスケタリーの製作技術がその時代に確立していたことがわかってきた。また、縄文時代草創期の土器のなかには、カゴと類似した形のもの、バスケットの製作技術を連想させる文様がついたものがあり、また同時期に属するとみられる土器の底部には、編まれた敷物の圧痕が残されているものもある。こうした縄文時代の事例は、バスケタリーの製作技術が後期旧石器時代に遡ることを示唆している。

しかしながら、バスケタリーの素材となる植物は腐朽（ふきゅう）しやすく、旧石器時代の遺跡からそのような人工遺物が発見された例は、世界的にみても非常に少ない。旧石器時代においても植物を素材とした道具が製作されていたはずだが、資料的な制約から研究はほとんど進んでいない。

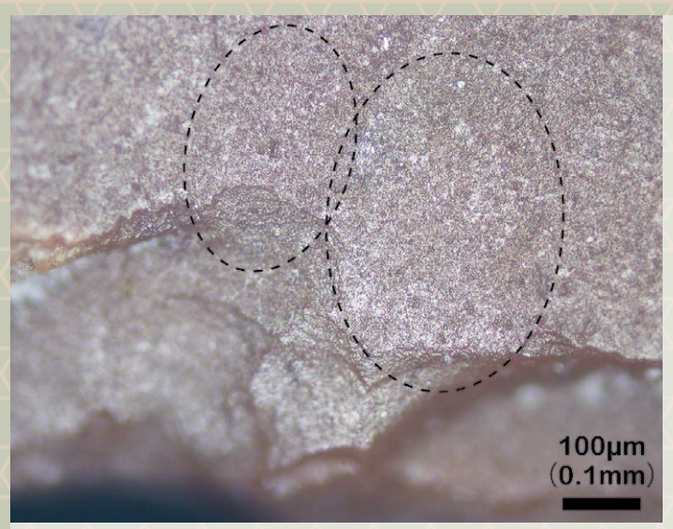
石器と植物

東南アジアにおいては、アフリカや西アジア、ヨーロッパなどで確認できる石器製作技術の変化が認められず、数十万年前から数千年前まで、その技術は単純なまま継続した。そうした技術の継続性は、当初、文化的な停滞を示していると考えられたが、民族誌などの知見に基づいて、タケ仮説とよばれる仮説が示され、その解釈が見直された。東南アジアの熱帯雨林にはタケやトウなどの有用な植物資源があり、特にタケは利器にもなる。石器はそうした植物の加工に用いられ、複雑な技術で製作される必要がなかったので単純な石器製作技術が継続した、というのがタケ仮説の内容である。この他にもいくつかの仮説がこれまでに提示されたが、ホモ・サピエンス（我々と同じ現生人類）が東南アジアにあらわれた約四～五万年前以降の時代の研究においては、タケ仮説は現在でも有力な仮説であり続けている。東南アジアでも資料的な制約はあるが、このような経緯があり、植物資源の利用まで視野に含めて研究が進められている。

実態にどのように迫るか

旧石器時代の東南アジアで植物資源が利用されていた証拠は、石器の使用痕分析や残渣（ざんさ）分析で得られている。加工した植物の繊維やデンプン粒などの他、加工時に残された線状痕や光沢面などの痕跡が石器の刃から発見されている。また、ホモ・サピエンスは四万七〇〇〇年前までにオーストラリアへ進出しており、植物製の舟で渡海したと推定されている。そのため、その時代から植物素材を組み合わせる技術が存在し、またバスケタリーも存在していたと思われる。植物素材の人工遺物が発見されないなかで、植物資源利用の実態にどのように迫るのかが課題となっている。

フィリピン、パラワン島のタボン洞窟で出土した旧石器時代の石器の分析から、植物資源利用を明らかにしようとする最新の研究成果を見てみよう。この研究では、現在パラワン島南部に住む先住民の植物加工技術の調査がおこなわれ、その調査結果に基づいて、タボン洞窟から出土した石器の複製品を用いた植物の加工実験がおこなわれた。加工技術のなかにはバスケタリーの素材製作が含まれており、植物を削って薄くする作業に用いられた複数の複製石器の表面には、刷毛目（はけめ）状の線状痕が確認された。植物をたたき切る作業に用いられたものにも同様の痕跡が残されていたため、この線状痕がただちにバスケタリーの素材製作の証拠になるとはいえない。だが、その痕跡の分布を検討して、加工作業ごとに違いが認められれば、バスケタリーや植物素材を組み合わせる技術の存在を示せるかもしれない。こうした民族考古学と実験考古学の手法を組み合わせた研究をさらに進めることで、後期旧石器時代の植物資源利用の実態に近づけるように思われる。



金属顕微鏡で観察した加工実験後の複製石器の刃の様子。点線内の白い部分は微弱な光沢面。左側の点線内では、刷毛目状の線状痕が左下から右上に向かって伸びている（2020年）

筆者がおこなった実験の様子。複製石器の刃を立てて前後に動かし、タケの内側を削った（3000ストローク、約30分、2019年）

筆者がおこなった実験で用いた複製石器。フィリピンのパナイ島のイロイロ市付近で採取されたチャートの剥片（2020年）

タボン洞窟周辺の様子。タボン洞窟は写真中央の岩よりもさらに奥のより高い場所に位置し、海側に向かって開口している（2019年）

スマートフォンで展示場を歩く

民博 人類基礎理論研究部　日髙（ひだか） 真吾（しんご）

電子ガイドの貸し出しをおこなうカウンターは展示場の入口にある

新しくなった「みんぱく電子ガイド」。画面は言語選択画面。9言語表記対応となっている

二〇二〇年三月、みんぱくでは展示場をさらに詳しく、楽しく観てもらうことを目的として、「みんぱく電子ガイド（以下、電子ガイド）」をリニューアルして運用を開始する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの驚異的な感染力は緊急事態宣言が発令されるまでに至り、みんぱくは閉館を余儀なくされた。その後、六月中旬から再開した展示場では、七月九日にサービスの規制がさらに緩和され、電子ガイドも消毒対応をしっかりおこないながら運用を開始している。

第三世代の展示案内ツール

電子ガイドは、一九九九年から運用されている展示案内のツールであり、展示資料の詳細情報を音声付きの動画（電子ガイド番組）で紹介するものである。今回開発した電子ガイドは第三世代のもので、情報を提供する端末がプレイステーション・ポータブルからスマートフォンに変わった。これは将来的に来館者それぞれが自分のスマートフォンに電子ガイドアプリをインストールし、みんぱくの歩き方やお気に入りの展示資料といった楽しみ方を記録することにより、多くの人たちと情報共有することを目指しているためである。

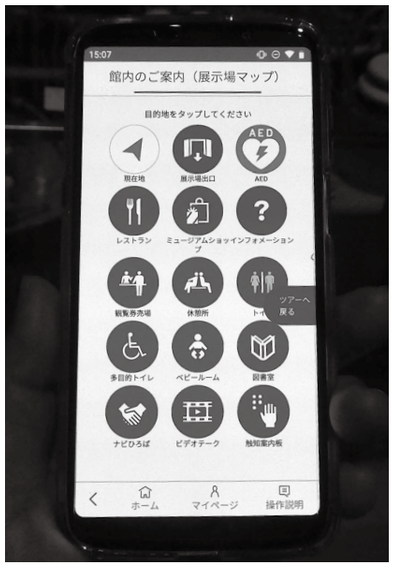
これまでの電子ガイドは、対象となる資料の近くに設置した電子ガイド番組の番号と画面上の電子ガイド番組の番号を照合し、それを選択・再生することで番組を視聴することができるしくみとなっていた。このしくみに対して来館者から、高所に掲示している展示資料の番組番号が見えない、あるいは資料が周りに複数あり、番組番号がどの資料に対応しているかわかりにくいという意見が寄せられていた。そこで、新しい電子ガイドでは、スマートフォンのカメラとAR（拡張現実）を組み合わせ、番組のある資料がカメラの画面に映った場合、それを通知する機能をもたせた。これによって、展示資料と電子ガイド番組の照合がしやすくなったと考えている。

これまで開発されてきたみんぱく電子ガイド。左から第1世代、第2世代

多言語対応とナビゲーションシステム

現在、みんぱくでは、外国人来館者のための多言語対応を少しずつ進めている。そして、新しい電子ガイドにおいても多言語化を図ることとした。具体的には日本語を英語に翻訳し、英語翻訳からアラビア語、中国語（簡体字）、フランス語、ロシア語、スペイン語の国連公用語、および中国語（繁体字）と韓国語に機械翻訳したものを字幕として解説映像に組み込んだ。ただし、機械翻訳の精度については課題が多く、この点は今後、さまざまな意見を取り入れながらより良い多言語対応へと発展させたい。

広大なみんぱくの展示場では、トイレや休憩場所に行きたくてもなかなかたどり着けないという相談が来館者から数多く寄せられていた。そこで、新しい電子ガイドには館内各施設のピクトサインをタップすることで、現在地から最短距離の場所をナビゲーションするシステムを整えた。また、衣・食・住・生業・娯楽・人生儀礼・宗教の視点から選定したおすすめ資料を観覧できる展示場のツアー機能も整えた。このことで、より魅力的にみんぱくを周遊できるようになったのではないかと思う。



ナビゲーションモードで表示されるピクトサイン

これからの展示案内システム

これからの博物館は、来館者の多様な要望に応えるため、最新のIT技術を利用した展示案内のシステムを次々に開発していくだろう。このとき開発者は、そのような技術になじみのない来館者も数多く存在していることを理解しておくことが必要である。来館者の多様性を想定しながら、どのようなシステム開発をおこなっていくのか。これからの展示案内システムでは、来館者の要望をリサーチしながら、日進月歩で進んでいくIT技術をバランスよく組み込んでいくことがより強く求められると考える。

シネ倶楽部

父と少年の旅

「オルジャスの白い馬」

原題：Horse Thieves

2019年／日本・カザフスタン／カザフ語・ロシア語／81分
監督：竹葉リサ、エルラン・ヌルムハンベトフ
出演：森山未來、サマル・イェスリャーモワ、マディ・メナイダロフほか

父と名乗れないまま少年と旅する
©「オルジャスの白い馬」製作委員会

藤本透子
民博 人類文明誌研究部

日本とカザフスタンの合作映画

天山山脈のふもとに広がる草原を舞台に、ある事件をきっかけとして揺れ動く家族の姿を繊細に描き出した映画だ。日本とカザフスタンの双方から監督と俳優が参加し、全編にわたりカザフスタンで撮影された。

カザフ人監督のエルラン・ヌルムハンベトフは、みんぱく映画会で二〇一六年に上映した「くるみの木」（二〇一五年）では結婚をめぐる騒動を明るく描いたが、本作品では一転して家族の死と喪失感という深刻なテーマに向き合っている。中央アジア映画に憧れていた竹葉リサ監督からのオファーで、共同監督を務めたという。

また、みんぱくワールドシネマで上映した「トルパン」（二〇〇八年、セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ監督）で、草原に咲くチューリップ（トルパン）のように可憐な娘を演じた女優サマル・イェスリャーモワが、本作品では俳優の森山未來と共演している。そして、オーディションで選ばれたカザフ人の少年、マディ・メナイダロフは森山未來と顔立ちが似ており、本作品中の複雑な親子関係を自然に演じきっている。

馬泥棒

幼いオルジャス少年が、両親や妹たちと暮らしているところから話は始まる。父はある日、二〇頭の馬を売りにバザールに出かける。一頭の美しい白馬だけは「オルジャスのものだから」と家に残してくれた。遠いバザールに連れていってもらえなかったオルジャスは、母の手伝いもそこそこに友達と遊びに行く。泉で泳ぐロシア人カップルをのぞき見したり、廃屋の壁に絵を描いたり、ケンケン遊びをしたり。――しかし、無邪気な暮らしは、その日の夜に突然終わりを告げる。雷雨のなかやってきた警察は、バザールに出かけた父が殺されたと母に告げた。馬泥棒の一味が、オルジャスの父とその仲間を殺して馬を奪ってしまったのだ。

馬の群れと牧夫（カザフスタン、2003年）

映画の舞台は一九九〇年代、ソ連から独立したばかりのカザフスタンが経済的に混乱していたころだ。それまで村の暮らしを支えていたソフホーズ（国営農場）は解散し、多くの人びとが失業した。家畜の世話や畑仕事に精を出して、どうにか暮らしていく日々が続いた。しかし、急速な市場経済化の波は人の心をも変え、家畜は市場で換金できて儲かるという感覚が浸透した。家畜泥棒が横行し、羊や山羊や牛よりも金銭的価値が高い馬が狙われた。実話をもとにした殺人事件の描写から、家族が受けた衝撃と悲しみが胸に迫る。

混沌のなかを生きていく少年

葬儀のまさにその日、喪失感に沈む家族のもとに、オルジャスが赤ん坊だったころに失踪した実父カイラートが突然あらわれる。オルジャスの母アイグリは、何年も失踪していたカイラートを簡単には赦せない。引っ越しを手伝うことになったカイラートは、自らを父と明かせないまま、ずっと会いたかった息子のオルジャスとともに草原を馬で行く。その引っ越しの旅の途中、野宿する焚き火のそばで、誰もいないバス停で、さびれた食堂で、二人のあいだの微妙な距離感が描かれる。森山未來演じるカイラートが起伏に富んだ草原を馬に乗って疾走していく場面も見どころだが、カイラートがカザフ語でとつとつと話し、オルジャスが徐々に打ち解けていく場面も印象的だ。

少年が父と信じる男性の腕時計を馬泥棒から取り戻すため、実父カイラートが奮闘するところは切ない。養父を失った少年と、実父の関係は複雑だ。引っ越しが終わって去っていくカイラートを見つめるオルジャスのまなざしに、混沌とした世界を生き抜いていくことの寂しさと、未来へのほのかな希望を感じる。わたしはカザフスタンの草原の村に二年滞在したとき、父親を亡くした幼い少年の家に住まわせてもらっていたが、その少年の成長がこの映画の世界に重なって見えた。ささやかな日常のなかにあるドラマを描き、運命に翻弄されながら生きる人びとの内に秘めた思いを、静かに熱く語りかけてくるような作品だ。

村で暮らす少年と母　©「オルジャスの白い馬」製作委員会

ことばの迷い道

「似て非なる」を地で行く

日髙（ひだか） 晋介（しんすけ）
東京外国語大学共同研究員

わたしは、ウズベキスタンで話されている言語であるウズベク語を研究しており、ウズベキスタンには二〇一四年から二〇一六年まで二年ほど滞在していた。他方、トルクメニスタンには、日本語教師として、二〇一八年から二〇一九年まで一年ほど派遣されていた。もちろん、ウズベキスタンでは、おもにウズベク語で現地の人たちとコミュニケーションをとっていた。トルクメニスタンでも、トルクメン語で……といきたいところであったが、トルクメン語に慣れないうちは大変なこともあった。ただし、このふたつの国は旧ソ連を構成する共和国でもあったため、ソ連崩壊後の現在でも、ロシア語が広く通用することにも注意されたい。

さて、ウズベク語とトルクメン語の話に戻る。これらふたつの言語は「チュルク諸語」という同じ言語グループに属しており、多くの類似点をもっている。基本的な語彙でいえば、「一」「二」は、ウズベク語では「ビル」「イッキ」であり、トルクメン語では「ビル」「イキ」である。文法的要素でいえば、過去形は、ウズベク語では「ディ」、トルクメン語では「ディ」あるいは「ドゥ」である。ただし、もちろん両言語のあいだには違う点もある。したがって、ウズベク語を勉強すれば、トルクメン語を使いこなせるというわけにはいかない。これが悩ましいところでもあり、おもしろいところでもある。

わたしを困らせた両言語の差異として、記憶に新しいのは「卵」である。わたしは、スーパーに行って卵を探しているときに、この問題に直面した。ウズベク語では「卵」は「トゥフム」というので、トルクメニスタンのスーパーでも、「トゥフムはどこですか？」とウズベク語風トルクメン語で聞いたら、店員にまったく理解されず、非常に焦った記憶がある。そのときは、ロシア語で切り抜け、事なきを得たのだが……。のちに、辞書で調べたところ、トルクメン語で「卵」は「ユムルトカ」であることがわかり、これ以後は言い間違い（？）をすることがなくなった。さらに例を挙げると、「右」も両言語で異なる。ウズベク語では「オン」、トルクメン語では「サグ」となる。ただし、悩ましいのは、「左」が似ていることである（ウズベク語では「チャプ」、トルクメン語では「チェプ」）。トルクメニスタンで白タクに乗り、わたしが目的地までナビゲートしたときも（運転手が行き先を知らない場合が多々ある）、非常にもどかしい気持ちで話した記憶がある。

「そんなことでドギマギするくらいなら、ロシア語で話せばよかろう」という読者の方もおられるであろう。ウズベク人がトルクメニスタンで観光する場合も、ロシア語で意思疎通するのだろう。ただ、ウズベク語をそれなりにかじっている非ネイティブの自分としては、他のチュルク諸語に興味がいくのは当然のことであるし、東京にいる今となってはこの悩ましい感じも何だか懐かしく感じられるのである。

月刊みんぱく 2020 9月号

編集後記

さる7月12日、北海道の白老（しらおい）町に国立アイヌ民族博物館を含むウポポイ（民族共生象徴空間）がオープンした。本号の特集ではそれを記念して「ウポポイでアイヌ文化を魅せる」を組んだ。ところで、白老町と聞いて、その位置が思い浮かぶ読者はどれくらいいるだろう。白老町は、支笏（しこつ）湖の南、苫小牧市と登別市のあいだにある太平洋に面した町である。古くからアイヌの人びとが暮らし、そこには以前、ポロトコタンと呼ばれる、立派なアイヌ民族博物館とチセ（住居）や土産物店などの諸施設があった。ウポポイはポロトコタンという前史をもつ、まさに象徴的な空間なのである。読者の皆さんには、ぜひ「ポロトコタン 最後の一日」（2018年、企画・制作：一般財団法人アイヌ民族博物館、22分50秒）という傑出した映像作品をウェブ上で見てからウポポイを訪ねてほしい。静謐（せいひつ）なポロト湖の風景もまた違ったものにうつるに違いない。

ポロトコタンには4頭のヒグマが飼われており、パイプから与えるおやつを器用に食べる姿が印象的だった。佐々木史郎館長によると、そのヒグマは幸いにも英国のヨークシャー野生動物公園に引き取られたそうだ。ウポポイはポロトコタンや旧アイヌ民族博物館の何を継承し、何を新たに創りだしていくのか。特集の各論稿からはその使命感と気概が伝わってくる。（南真木人）

2020年8月号、P16に掲載しておりました「極北の衣装（男性用）（上着:H0212848、手袋:H0212849、ズボン：H0212850、靴：H0212851）」の資料は、資料管理のため展示されておりません。

●表紙:伝統芸能上演（鶴の舞）（提供:公益財団法人 アイヌ民族文化財団、2020年）

次号の予告

特集

「世界の地相術」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

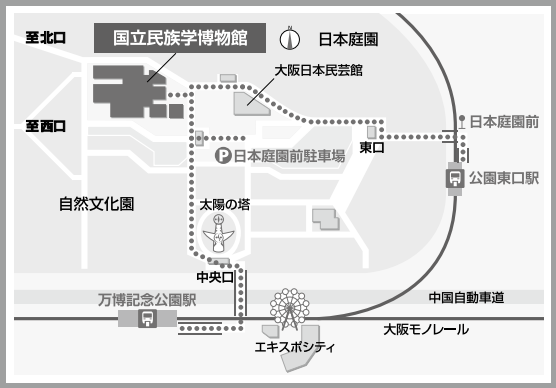
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2020年9月号
第44巻第9号通巻第516号　2020年9月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　株式会社 遊文舎

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology